シリーズ先生（十四）再掲

私を支えてくれたこどもたち、先生方・・

山﨑　徹

前号（132）の編集に大きなミスがあり修正して再掲します。　編集部

研究を続けているの

「山﨑君、研究を続けているの」

小学校の教師になって三年目の夏、卒業した大学の研究室の何かの集まりに出席したら、佐々木隆爾先生が声をかけてくださった。佐々木先生が私を覚えていてくださったことに驚き、そして、うれしく思った。佐々木先生は、私の卒業論文の指導教官だった。

学生の時、仕送りがほとんどなかったので、日曜以外、大学の生協食堂などで食器洗いや飯炊きに五、六時間働いた。働くことが好きだったので苦にはならなかったが、それも影響してか、ほとんどの講義や授業は初めと終わりだけの出席。私の大学は、当時はそれでも卒業することができた。しかし、卒業論文は書かなければならない。テーマは、「一九五〇年代初期における民主的医療運動の展開―汐田診療所の設立を中心に」。日本現代史ということで佐々木先生に指導教官をお願いした。卒論提出後の面談で先生はただ一つ、「一九五〇年代初期に民医連運動が起き、広がっていった要因は何だと考えますか」

と聞かれた。私は、

「当時の民主運動の高まりの一環と思います」

と答えた。先生からのコメントはなかった。

先生が、「山﨑君、研究を続けているの」と声をか

けてくださってからしばらくして、私は卒論に三年ぶりに目を通した。そして、先生の質問の意図にはっと気づいた。…一九五一年にサンフランシスコ平和条約が締結され、日本がアメリカの全面占領から半占領（従属）になった……この情勢の変化があったからと。この基本的なことすら理解できていなかった私にもかかわらず、「研究を続けているの」と声をかけてくださった先生。すべて承知の上、私を受け入れてくださった先生。卒論にはほとんど値しなかったにもかかわらず、覚えていてくださった先生。私は、佐々木先生の講義も受けていなかったし、指導教官にはお願いしたが卒論について相談したこともなかった。すべて自分で決め、進めた。でも、私にとって佐々木先生は恩師。

先生は一九九五年四月、部落問題研究所から部落研ブックレット「戦後政治支配と部落問題―『解同路線』はどう形成されたか」を出版された。私は、「歴史の研究とはこういうことか」と自分に言い聞かせながら読んだ。

私です……その言葉の尊さに私は決意した

新卒三年目の一九八〇年の冬、新潟県教職員組合西蒲燕支部の役員選挙は、私の小学校分会の不正選挙が大きな問題になっていた。同志会（いわゆる学閥連合）のA分会長が、「投票日前に投票させる」「同志会と対立する候補の宣伝物は配布しない」という不正を行い、それが投票後の支部大会などで厳しく追及された。

当時、私は第一類臨時教員（中免講師）で「三年以内に小学校の免許を取得すれば教諭採用する」という不安定な身分であったので組合には入っていなかったし、そして弱かった。私より一年後に新卒として来られた高木弘子先生は組合に入っていた。私は高木先生から不正を聞き、同志会と対立して立候補していた先生方の中心にいた小熊隆先生（故人・当研究所元所員）に知らせた。「民主主義の問題はあいまいにできない」と、小熊先生は私に配慮しながら選挙のやり直しを含め不正を厳しく追及した。

A分会長は校長、教頭と相談しながら「誰が小熊に知らせたのか」と分会員一人ひとりを調べ始めた。授業中も分会員を回りながら。組合員でない私のところまでも。暗く、だれも口を開かない放課後の教務室。数日後、高木先生は、

「B先生が疑われています。小熊先生に知らせたの

は私ですと言います」
と私に言った。知らせたのは私。
翌朝の職員朝会の後、私は椅子から立ち上がり、
「小熊先生に組合のことを知らせたのは私です」
と言った。
四月、私も高木先生も異動。私は、「高木先生に恥じない生き方をしたい」と心に誓った。
二校目で組合に入り、支部の役員に立候補した。長岡支部の選挙公報には「分会推薦」の欄があった。私は「分会推薦」をお願いしたが、「山崎は29分ストをした」という理由で分会推薦をしないという。私は、「ストには反対したが、みんなで決めたことなので組合民主主義に従ってストをした」
と理解を求めた。選挙公報が配られると、隣の学校の同志会候補の「分会推薦欄」に私の学校の分会も載っていた。私は、
「私は誠意を込めて皆さんに分会推薦をお願いした。あいさつにも来ない隣の分会の候補にだれが、どの場で分会推薦を決めたのか」
と穏やかに、しかし厳しく問い詰めた。次の立候補では、「分会推薦」で分会員の投票を求めた。実施され、私は11対12で分会推薦されないことになった。
その後、最後に出雲崎小学校に勤務した他はすべて西蒲・燕の学校に勤務した。
「西蒲教師の会」の先生方からは「ヤマさん」と呼んでもらい、多くを学んだ。小熊隆先生のほか、豪快な野沢勲先生（故人・当研究所元所員）、厳しい西蒲燕支部の組合選挙で執行委員に当選した亀山淳先生、石原允之先生、尺八の結城照男先生、ギターの小川伸一先生、結城先生と小川先生の集団づくりゲーム「猛獣狩り」は天下一品。ケーナの佐藤勝先生、生活指導だよりの横山良治先生、作文教育の坂爪英世先生、郷土史研究の飯田素州先生（故人）、つっぱりの子どもたちとの数々のエピソードの亀山裕先生、組合運動のリーダー井上士先生（故人）……みんな酒が好きで、多くは酒豪だった。そして、日本画家の佐藤準子先生をはじめ、優しく強い女性の先生方。

今日の自分が、昨日の自分であったならと思う日々

「教師には、眠れぬ夜があります。いらだち反抗し、心を開いてくれない子どものこと、心ないことを言っ

て子どもを傷つけてしまったことへの悔恨、山のようにたまった仕事……」（三上満著「眠れぬ夜の教師のために」国民文庫・大月書店より）

私が教員になったのは「長男で家に入らなければならない」ということが一番の理由だった。新潟県の教員採用試験（中学・高校社会科教員）に合格したが、中学と高校の社会科の教員の採用はその年はごく少数だった。小学校の教員を勧められ応じた。

教育や子どもについて特別に学んだこともなかったし、子どもたちが好きで好きでたまらないということでもなかった。ただ私は働くことが好きだった。そのうちに子どもたちと夢中になって遊ぶようになり、「夏休みが早く終わってほしい」と思うようになっていった。

しかし、教育とは、子どもとはというより根本的なところでの力不足から過ち、ときには子どもの成長に否定的な影響を与えかねない大きな過ちをおかしたこともあった。

○心臓に疾患を持っている子を、養護教諭の助言があったとはいえ運動会の徒競走に運動会当日参加させなかったこと。しかも、保護者との相談もなしで。

○「どの子にもしっかりした学力を」と、機械的なやり方でしかも表面上は子ども一人ひとりが自分で決めたようなやり方で事実上強制し、それに適応できなかった子どもを不登校に追いやり、つらい思いをさせたこと。

○出張授業をしてもらっていた音楽で、授業態度に問題があると指摘された子どもに事情を聞いているとき、思わず手をあげてしまったこと。この子は、最初の同級会には参加した。（子どもたちは四十歳、私は五十七歳）私は率直に詫びた。その子は、覚えていたようであったが、次回からの同級会には出席はしていない。

……これらは、今も何かの折に脳裏によみがえり、「眠れぬ夜の教師」になりそうになる。そして、今の自分があのときの自分であったならばと悔やむ。

そんな私を支えてくれたのは、やはり子どもたちであり、小熊隆先生や佐藤勝先生をはじめとした「西蒲教師の会」の先生方だった。教え子たちとばったり顔を合わせたりすると、「山﨑先生」と声をかけてくれる。「覚えている？」と聞くと、「とにかく印象に残っ

ている先生。おっかなかったけどおもしろかった先生」と答える。子どもたちとの関係がうまくいかなく、佐藤先生に相談すると、「ヤマさん、うまくいかない関係を持ったという関係も大事なんだよ」と、励ましてくれた。

大切にし続けた二つの詩
―感性を育て続けること

その詩に出合ってから、受け持った子どもたちと読み続けた二つの詩がある。

いつくしむ　　五年　佐藤　房江

「いつくしむ」
辞書には
「だいじにしてかわいがる」
と書いてあった。
おとうさんが
「いつくしむ」とは
こうすることだ
と　わたしの頭をなでてくれた。

「いつくしむ」
やさしい感じのすることばだ。
なんとなく
古くから
日本にあるような
感じのすることばだ。
「いつくしむ」
おとうさんやおかあさんは
いつもわたしを
いつくしんでいてくれる
「いつくしむ」
ということば。
おとうさんやおかあさんの
あたたかい手で
つくりだされたことばだろう。

（『忘れえぬ児童詩』日本作文の会編　百合出版より）

友だち　　四年　清水　法子

もうじき父の日や
また　先生は高橋さんに

「おとうさん」の詩を書かすのやろ
先生　おとうさんのこというたんびに
「おとうさん」の詩を書かすたんびに
直ちゃん　泣いてはんねやで……
きょねんも　父の日に
直ちゃんに　詩を書かしたやろ
ほかの人は　おとうさんいるから
すらすら詩を　書かはった
でも　直ちゃん
おとうさん　いはらへんのやで
直ちゃん　詩をかいたあと
何かいも　目をこすってはった……
こんどの父の日は
先生　一日中
直ちゃんのおとうさんになったげ
名前も
「直子」と　呼んだげ
どっか　つれて行ってあげ
先生のこどもさんに　たのんだげよか
「直ちゃん　おとうさん　いはらへん
一日だけ　おとうさん　かして。」

そういうても
先生の子どもさん　おこらへんやろ
一日だけやったら
しんぼうしてくれはるやろ
なあ　先生
こんどの　父の日に　みんなに
詩をかかしたら　あかんよ
直ちゃんに　詩をかかしたらあかんよ
先生　その日は
直ちゃんの　おとうさんなんやで

（江口季好著「児童詩教育入門」百合出版より）

同級会に出たとき、幹事役の子どもから
「先生、あの『直ちゃんの詩』、今でも受け持ちの子どもたちに読んでやってるの」
と聞かれ、「そうだよ」と答えると、
「先生の子どものひとりは直子さんですよね。あの詩をもとに直子としたんですか」
とも聞かれた。「そうじゃないよ」と答えた。子どもたちには「友だち」の詩が心に残っていた。その幹事役の子も名前は「直子」。直子さんは、

「私、子どもの学校のＰＴＡの新聞に先生のことを書いたんですよ。『夜、勉強に困っている子を呼んで教えていた先生とかね』と。『少しエッチ』とも書いたら、そこはカットしてほしいと言われたんですよ」

私は、エッと思ったが、三上満先生も子どもたちに「エッチ」と評価されたことがある。満先生は、それを「人間的感情にあふれた教育をする」と理解することにした（「眠れぬ夜の教師のために」より）。

教える技術は大切である。しかし、それ以上に大切なことは子どもへの感性、教育への感性。私は、二つの詩をその感性を振り返り実践を検証する拠り所とするよう心掛けた。

山﨑先生、がんばれ！　がんばれ、先生！

今振り返ると五十歳前後から少しずつ肩ひじを張らずにやれるようになってきたと思う。授業と学級経営を大切にし、「明日できることは今日しない」「謝ってすむことはそれだけのこと」と自分に都合の良い理屈も思いついた。

定年退職をしてから二年目の秋、私は出雲崎中学校の体育祭に出かけた。中学校三年生から一年生までのすべての子どもを私は、出雲崎小学校で担任していた。

三年生の子どもからは、「……いつもみんなにやさしく接してくれたり、時には昼休みをつかってみんなに反省文を書かせたりしてました（笑）」「……山﨑先生は皆から好かれていて、先生が投げキッスをすると皆それをおもしろがっていました。日常生活では、『じまんじゃないけどね』が口ぐせでしたね」などの手紙をもらっていた。

二年生の子どもは四年と六年のときに担任。五年生の時にいろいろな問題が起き、校長と教頭から、「他に受け持つ先生がいません。子どもたちは先生を信頼していますので、ぜひ六年生を受け持ってほしい」と懇請され、体調に不安があったが教職の最後に担任した。

一年生の子どもは、保護者から四年生に続き「五年生でも受け持ってほしい、大丈夫ですよね」という声があったのだが、六年担任と決めたのでどう答えてよいか言葉が出なかった。

体育祭に出かけたのは子どもたちから連絡をもらったわけでも、ましてや中学校から招待されたわけでもない。目立たないようにしていたが、はたして子ども

たちは気づき、三年生の女子のリーダー二人が私に声をかけに来た。そして、

「先生、ＰＴＡ種目の紅白玉入れに出て」

と言う。そっと子どもたちの姿を見ていたいと思っていたし、多くの保護者もいたので少しためらったが、せっかく出てほしいと言うのだから出ることにした。少してれながら入場門に並び、子どもたちには小さく手を振った。

競技が始まった。やるときは本気になる。投げ上げた玉は籠に入らない。すると、

「山﨑先生、がんばれ！　がんばれ！先生！」

の子どもたちの大声援が……。

（やまざき　とおる・長岡市）

唱歌「赤とんぼ」考

小学校唱歌「赤とんぼ」は、いつ調査しても日本人の愛唱歌の一番にランクされるという。歌詞もメロディも日本人の琴線に触れる歌というべきだろう。だからいつ誰が歌っても子どもの頃に戻ることができる名歌というべきだろう。

ところが私は歌詞のなかの「負われて」の部分をつい最近まで「追われて」と理解して歌ってきた。だから歌の内容が赤とんぼが子どもに追われたことを回想する内容になってくる。ところがこの歌の三番では「１５で姉やは嫁に行き」の歌詞に結びつかない。つまり自分をおんぶして子守りをしてくれた姉やを回想することにならない。私の誤解は私だけの誤解とは言えないらしい。

教育学者の山住正巳（『子どもの歌を語る』1994）によれば、この誤解は歌の三番を歌わないところから来るらしい。山住はある学校で音楽の授業を視察して気づいたという。三番が一二番の歌の内容を深めているにも関わらず、三番を歌わないのは「文化的犯罪」とも言っている。私は納得した。（大滝）